

野に仏・里に仏

大谷 眞

第一回目の旅・その三

人はお遍路さんをどのように見ているのだろうか

4月5日 晴れ（後編）

光りはまたふわふわと動く。しかし、この光が、どうやら懐中電灯のそれらしい、と気付いた時、鈴の音も今やすくそばまで近づいていた。

突然、まばゆい光の輪が、私を包んだ。もう幽霊でもなんでもない、人間がこの先の麓から登つて来たのだ。ほっとすると同時に、でもなぜに今頃？と別の不安が頭をもたげた。

「ごんばんわ。すみません。が軒をお借りしていません。」

とりあえず、光の輪に向かつてあいさつをした。私の一言に答えるかのように、闇の中から髭面の男がぬつと現れた。片手には背丈以上の杖、先端には鈴が取り付けられている。足元には子犬が

た。

「どうしてそんなところに寝てるんだ！通夜をするのなら、お堂の中でちゃんとやれ！」

開口一番、彼はなじるように怒鳴った。

「・・・お堂はカギもかかっていますから、ここで休ませてもらいました。」

「人を信じない奴は、そう思い込んでいるんだ！」

彼の方も相当肝を冷やされ、腹を立てているのだろう。それでも本当にお堂の戸が開かない事を知ると、今度は横手に回り、そのドアを開けた。中に入り、表のガラス戸を開けてから、中で寝ろ、と言う。この風体なら途中通り過ぎた、あの長戸庵の住人に違いない、とその時確信した。

「あんたは僕のレモンティーを飲まんかったら。お接待を断るのは非

常に失礼な事だ。だからあんたはこんなところで野宿なんかしているんだ！」

あれ？どこかで見たのだろうか？

「レモンティーは頂きませんが、色紙が気に入ったので一枚頂きました。」

この一言で、彼は少し機嫌が直ったようだ。

「・・・そうか、あの絵の良さがわかるんなら、あんたもまんざらじゃないな。」

言われるまま、お堂に上がり、彼が祭壇の口ウソクに火を点けると、同じ年頃の男が薄明かりの中に浮かび上がった。頭には私と同じく煮染めたような手ぬぐいを巻き、顔半分は髭で覆われていた。衣服はしばらく洗濯した様子もない。どう見ても山賊といういで立ちである。改めて彼に聞く、やはりあの長戸庵の住人だった。どうやら今日、彼はお遍路の一人を焼山寺に送り届けた帰りらしい。酒をふるまわれ、帰りがついで夜になった、と言う。

「とにかく通夜をきちんとやって、酒でも飲もう。」



彼は言いながら、お堂の隅から一升瓶と茶碗をとり出して来た。彼の言うとおり、靴をそろえ、杖を入り口の戸に立て掛けた。祭壇にお線香も上げる。本来なら、それにお経も上げるのだが、と彼は言い、そのくせ、何も唱えるわけでもなく、ただ酒をぐびぐびとあおった。飲めない私は話だけで付き合う。後は延々と彼の独演会となった。

話を要約すると、若いころ父への反発から家を飛び出し、各地を放浪した。墓場に寝たり（お供え

も当時は豊富で食べ物には困らなかつたらしい。）齋場の窯の中に寝たりもした。（昼間使用した窯は夜には暖かいベッドになる、と。）この間、いろいろな宗教に顔を突っ込み弟子にもなった。画僧として居候させてもらった時期もある。最後は同じ歳、同じ日に生まれた友人の死をきっかけに3年前、あの庵に住み着いた、という。有償ボランティアで働いていたころ、知りあった奥さんもいるらしい。

「この道は、若い自殺志願

者も通りかかる。来るものは拒まず、去るものは追いかけてもこだわるのが僕の哲学。彼らを助けるのが、今、自分に与えられた役目やと思っっている。」

人は彼を熊さんと呼ぶ。彼に会ったためだけに、この山奥に分け入って来るものもいる、新聞にも紹介された、イタリアからの記者も取材に来た、と彼は言う。宗教哲学も彼独特のもので、今はあの庵に安置されたお大師様と直接向き合い、直々に教えを請う日々を送って

いる、とのこと。私には一体彼が何物なのかはかりかねた。とにかく聞き手に回り、この不思議なめぐり合わせを見守ることにした。

そのうち酒が回ったのか、やっと彼は静かになった。明日の予定も気になっていたので、このあたりでお開きとなった。彼は押し入れから勝手に取り出した布団にくるまり、すぐにいびきをかき始めた。私も寝袋にもぐり込んだ。時計は11時を指していた。彼の連れていた子犬もすみっこで丸くなっている。夜の寒さが一段と増し始めた。

4月6日 晴れ後曇り
「痛てーっ……」

突然彼が叫び出した。寒さと、天井を走り回るネズミらしい物音に悩まされ、うとうとしていた矢先だったので、びつくりして跳び起きた。

「どうしたんですかっ！」「あかん！こむらがえりや！痛てーっ！」

七転八倒の末、急に静かになった。慌てて様子をつかがう。なんのこと

はない、いびきをかいている。しばらくすると、「痛てーっ！痛ててっ！……」

とまた叫び出す。今度はもう驚かない。時計を見ると4時、あきらめて起きることにした。彼も寝床からはい出し、また話し初めた。頑張る目標ができれば人間強くなれる、と淡々と話す。彼の八方破れの生き方と、まじめな話とのギャップに戸惑いながら、彼は彼なりに自分の生き方を探しているのかも知れない、と思った。だとすると、外見よりは案外、真つ正直な男なのだろうか……。

外が白み始めた頃、お堂の中のホウキを借りて掃除をした。掃いても掃いてもほこりがでる。ひどいところで一晩過ごしたものだ。しかし、外は冷え込みが厳しい。昨夜、あのまま外で寝ていたらどうなったことやら。これは彼に感謝すべきだろう。

庵の前で彼と別れた。「また手紙でもくれよ。」

と彼は言う。書けばなぜかちゃんと届くらしい。焼山寺への道を下りなが

ら、彼の生き様を反芻する。すぎましい生き方の中で自分を模索する姿は、あまりに粗削りな所が目立つ。一歩間違えば、救いの道どころか、無限地獄に落ち込まざるをえない。しかし私とて同じ。自分の固執する理想と夢は、いわば両刃の剣だ。切りつけつつ、自らもまた血を流さずにはいられない。

一本杉庵からの道はいったん集落に下り、小さな川を渡った。ここからまた、心臓破りの急な登りとなった。延々と続いた坂がようやく開け、焼山寺の山門の前に出る頃には、精根尽きた思いだった。輪袈裟をつけ服装を整え、お参りを済ませた。

納経所へ行くと、若い男が座っていた。頭からすると一応僧職にあるのだろう。一人か、車で来たのか、昨日はどこに泊まった、などと聞く。正直に昨夜は一本杉庵の軒を借りた事を話し、ついでにここからの道を教えてもらおうとすると、彼は



急に不機嫌になり、けんもほろろの対応に変わった。昨夜の無断拝借に気を悪くしたのだろうか？

しかし寺の関係者ともあるうお人が、このような態度をとられるのには大いに面くらってしまった。しばらくあつげとられ、それでも気を取り直し、複雑な気持ちで山を下る。

車道を30分ほど行くと、「杖杉庵」に差しかけた。お遍路の元祖(?)衛門三郎が四国巡拝の果てに、ようようお大師さんに巡り会った場所と聞く。彼の持つ杉の杖が、その

まま大木となった、というのがこの庵の由来らしい。

ちようど一組、お参りを済ませたグループを、車まで見送りに出られていたご住職に、納経帳への記帳をお願いする。ご苦労様です、と言葉をいただいてから、

「昨夜はこの前の境内に、お歩きのお遍路さんが3人、テントを張って泊まられたんですよ。」と教えてくれた。それから筆を運びながら、「昨夜はどちらにお泊まりで？」

と聞かれた。ここでも一本杉庵で泊まらせていただいた事を正直に話すと、「それはそれは、苦行なされましたなあ。」

とねぎらわれた。お礼を言つてザックをかつぎ立ち去ろうとすると、わざわざ外まで見送りに出て来られ、

「お歩きでしたら、道を教えて進ませましょう。」

と庭先から眼下に広がる景色を指さし、この先の道を丁寧に教えていただいた。別れる時、合掌して見送つていただく。もったいなく、私もぎこちな

く手を合わせる。先の焼山寺の若者も、このご住職も、同じ僧職にありながら、この差はどこから生まれるのだろうか、ふとそう思った。

教えられた道を下り切ると、集落があり、食堂らしき建物を見つけた。そういえば、朝から何も口にしていない。これ幸い、何か食料を仕入れねば、中にはいると、「ここでは何も販売していません。お店ならここを下ったところにありますから。」と女性が出て来られて申し訳なさそうに言われる。それでも出て行こうとする、

「お遍路さん、お接待させていただきます。」

とミルクを差し出された。恐縮しながらありがたく頂くことにした。

少し歩いて、教えていただいた店を見つけた。ところが中に入ろうとすると表の戸は閉まっている。横手の戸を開けて声をかけるが返事がない。しかたなく店の横で待つことにした。ここで何か仕入れないと、この先不安がある。そのうち、店の

前に車が止まる音がして、見ると男が一人、鍵を開けて中に入るところだった。どうやら朝の仕入れの帰りらしい。続いて店に入ると、私の姿を見ていきなり、

「何のようや！」

と一喝されてしまった。これには大いに面食らった。

「・・・食料を買いに来たつもりですが・・・。」

当たり前のことにとどう答えたらよいのやら。男

は返事を聞くと視線を落とし、黙ったまま荷物の仕分けを始めた。そこではつと気がついた。どうやら物乞いに間違われたらしい。複雑な思いでパンなど購入し店を出た。

しかし、今の気持ちをどう説明すればよいのだろう、言い様のない惨めさと、恥ずかしさと、怒りが込み上げてくる。でもこの感情はどこに起因するのだろうか？あるいはそれは、自らが過去まとった社会的な衣に、私自身がまだこだわり続けている。せいなのかも知れない。今の私という存在は、誰でもない、ただの一お遍路に過ぎない。しかしそ

のお遍路を、人は全く違う価値でとらえている。先の食堂の婦人とこの店の主人、焼山寺の若者と杖杉庵のご住職、この二組のコントラストは、まさに時代を象徴するかのようには思えた。それはすなわち、自らの存在の価値を、他人という鏡に写して見ているのだから・・・。

舗装道をうねうねと登る。振り向くたび、はるか下に先程の集落を挟んで、向かいの山腹に遠く杖杉庵の赤い屋根と、新旧二本の杉の大木が見えた。仏教の形骸化が問われる昨今にあつて、まだこんな所で仏の道は確かに生きている、そう思った。峠の手前でもう一度振り返り、心から手を合わせた。峠の無人のお庵で軒を借り、しばらく休憩した後、長い下りを歩いた。途中、美しい集落を抜けた。はるか下には川が蛇行し、山々が遠く連なっている。弘法大師が芸術家だったと言われるゆえんは、彼の開いた霊場の美しさから来ている、と何かで読んだことがある。こんな風景を見ていると、なる



ほど、と思えてしまう。
下りきって、広い車道
に出ると、あとは何の変
哲もない道が続いた。バ
ス停の前を通るたび、バ
スに乗って徳島に帰るこ
とばかり考えた。

途中、大日寺門前の宿
に予約をすべく、電話を
入れると、

「相部屋なら空いています。」
とのこと。昨夜はゆっく
り休めなかったので、で
きれば一人部屋を、とた
めらっていると、
「きょうび、一人なら相部
屋が当たり前でしょう
が！」

と面倒くさそうに言われ、
他を当てることにした。

次の「かどや」は、
「小さな部屋になりますけ
ど、それでもよろしけれ
ばお待ちしています。」
とのこと。ここにお願
いすることにした。

歩くごとに、足の痛み
がますますひどくなった。
昨夜は足の手入れが行き
届かなかったせいだろう。
しかし山道ではほとんど
痛まなかった足が、舗装
道ではとたんに痛むのは
なぜだろう。5時頃、やつ
との思いで宿に着いた。
21キロの単調なアスファ

ルトの道こそ、私にとっ
て本当の「遍路転がし」と
思えた。

天気は下り坂、部屋の
テレビは明日の雨を予報
していた。

4月7日 雨

目が覚めると窓は既に
明るい。時計は午前5時
を指していた。喉が少し
痛んだ。ちよろちよると
水の音がする。すぐ前の
道路を走る車の音に、
じゃーっという水を切る
音も混じっていた。窓を
開けるとやはり雨だった。

今日は今回の予定の最

終日。この雨ではどこまで歩けるか見当もつかない。洗面へ行こうと部屋のドアを開けると、靴の散乱する土間を挟んで、むかしの廊下にまで布団を敷いて寝ている人がいた。昨夜は満室だったようだ。

6時半をまわって隣の棟へ朝食に行く。一足先に出立するお遍路さんと女将さんが話をしていた。「お歩きのお遍路さんはお一人が多くて、お断りされる宿がほとんどですけど、うちは必ずお受けしているんですよ。」

商売だけで考えるのなら、部屋一つを一人で泊めるのは確かに効率が悪い。おまけに汗臭い歩き遍路は、敬遠したくなるのは分かる気がする。ただこうして、門前で商いができるのも、お遍路さんあつてのこと。「観光八分、信仰二分」と言われる団体さんばかり泊め、本来の歩き遍路を敬遠するのはまさに時代を象徴しているように思える。今回の遍路に出る前、何冊かの体験記で読んだ「遍路宿」と呼ばれる木賃宿は、今ではもう存在しな

いのだろうか。お遍路が苦行でなく、ただのお寺巡りに変わったとき、宿もその形態を変えざるを得なかったのかもしれない。

朝食後出発。玄関でポンチョを着ていると、同じ歩きお遍路さんが通りかかり、あいさつを交わした。年配の男性と、その息子ぐらいの若者との二人づれだ。

工事中だった第十三番大日寺を皮切りに、時折強く降る雨の中、第十四番常楽寺、第十五番国分寺、第十六番観音寺と相次いでお参りをする。大日寺から第十七番井戸寺まで転々と札所が続き、この間は比較的歩きやすい。

井戸寺の手前、踏み切りを渡る。少し離れた所に駅を見つけ、念のため時刻表の確認を、と立ち寄ることにした。待合室で朝、宿の女将さんと話をしていたお遍路さんに会う。彼はここからJRを使用し、次の第十八番薬王寺まで行くのだから。地図で見ればこの先、一般国道を利用し、徳島市

内を抜ける何の変哲もない道のりが予測できた。確かにこの間、お遍路姿では場違いかも知れない。

井戸寺へ着くと、朝、宿の前を通りかかった二人に再会した。彼らもカッパを脱いで休息中とあって、少し話をした。若者と年配のカップルなので親子かと思ったら、単に途中で一緒に二人で回っている、とのこと。若者は北海道から、初老の男は岡山から、と教えてくれた。

「ずっと歩いて回られる予定ですか？」

「そのつもりです。」

「宿はどうされていますか？」

「基本的にテントを使っています。でも3日に一度ぐらいは民宿にお世話になっています。風呂にも入らなきゃなりませんから。」

「でもテントを張ると言っても、山の中ならともかく、平地ではどうされていますんですか？」

「家の人に許可を得て、桃畑に泊まったり、公園とかお寺の境内の隅っこか・・・、今のところは何とかなっています。」



ははあ、杖杉庵でのキャンプとは、彼らのことだったのか。二人とも最後まで一気に回る予定とのこと。お互いの無事を祈って別れた。

お参りをした後、さてどうしようか、と考えた。今の時間なら一気に第十八番恩山寺まで歩き、今回の打ち止めとしても、帰りのフェリーには充分間に合いそうだ。しかし、雨も小ぶりにはなったと言えこの天気、足の不調の事もある。しかも恩山寺までは、地図上では20キロ以上もある。かと

いつてこの間、JRを使えば、当初の徒歩貫徹の夢も早くも崩れてしまっ。でも、ただ歩くためだけの歩きなら、本来旅を楽しむ意味からは外れてしまっ。でも苦行だからこそのお遍路ではないか……。いくら考えても堂々巡りで、結局、結論は次回に持ち越すことにした。今回は先程、井戸寺までの途中に通過したJR「府中」駅で「打ち止め」とする。

島への車窓に流れる風景を見ながら、歩くスピードとの差をしみじみ考えた。この差が「文明」なら、人はその代償として、こまやかな自然との触れ合いを失った事になる。そして我々は、さらに失い続けるだろう、そう思った。その価値を取り違えたままです。

一回目のお遍路がやっと終わった。朝からの鼻水がまだ止まらない。

駅の待ち合いで身支度を解き、平服に戻った。徳